



### 幼小教育の力

数ある国立大学法人のなかで、奈良女子大学は幼稚園から附属を擁する数少ない大学である。その特徴を活かした新しい教育システムの構築やその重要性についての言説を、これまで何度となく耳にしてきたが、私にはそれがうまく実感できなかった。幼稚園教育の重要性が、具体的なかたちで理解できなかったからである。

委員をしている関係で、附属小学校の児童の面接を行ったことがある。小学六年生がどの程度の発達段階にあるのか、自分の記憶が曖昧なまま、彼らに接することとなったが、そのしっかりした受け答えを聞いて、小学校の教育の力を実感した。しかし、幼稚園の教育については、遊戯をさせられた程度の記憶しかなく、いわば未知の世界であった。最近、それが一変した。

私には、幼稚園に通う三歳の愚息がいる。近所のスーパーに連れていくと、一人でかってに走り出して姿をくらます、そういう愚息である。奈良市に住居があれば、附属幼稚園の受験も考えたろうが、あいにく住所は堺市なのでそれはかなわない。いくつか情報を集めて、市内の小規模などある私立幼稚園に通わせることにした。

### 西谷地 晴美(附属学校運営委員・人間文化研究科)

入園式でも、やはり愚息は走っていた。他の園児がまがりなりにも席についている中で、園長先生の講話の間、ただ一人講堂の中をうれしそうに走り回っている。妻と何人かの教師が愚息を捕まえようと努力していたが、全くいうことを聞かない。教育のプロでも愚息を御すのは無理なのかと、暗澹たる気持ちになった。

数ヶ月後、授業を参観して驚いた。愚息がおとなしく席について、教師の話聞いていたからである。教育におけるアマチュア(親)とプロの違いを目の当たりにして、幼稚園教育の重要性を実感したことはいうまでもない。

さて、参観授業の終わりに、園児たちが教室の前に一列に並び、参観にきた保護者に感謝の歌をうたい始めた。我が愚息はその間ずっと、ただ一人自分の席を動かさず、悠然と水筒のお茶をすすっていた。私はそれを見ながら、幼小一貫教育の必要性に想いを馳せた。



### 附属から教育の可能性をひらく試み

本学の附属校園いずれにおいても、学び(遊びを含む)の本質を追究する本物志向の教育実践が行われています。これは全国的にも希少であり誇りに思いますし、本学の貴重な財産でもあります。

私が任を負う教育システム研究開発センターでは、こうした優れた実践を生み出しているメカニズムを探ります。「3歳から18歳までの人間発達をみすえた現代的自由教育のシステム開発」を中心的な研究課題とし、学校教育の新たな可能性をひらく教育システムの開発と提言をめざして、研究を進めています。従来は、幼、小、中、高の学校の壁に子どもの発達を分断され、学びの学校間格差に子どもは悩まされ、必要以上に適応の努力を求められてきました。そこで、15年という貴重な発達期間を見通した上で、それぞれの段階で重要な子どもの経験や教育課題とは何か、それは子どもの自主性、自発性を最大限に生かすという附属伝統の教育方法でいかに実現可能なのか、などの問題に取り組んでいます。具体的には、幼一小などの学校間連携や学習材との関わり方(メディア・リテラシー)、授業実践の研究を重点的に進めています。

また、3歳の園児から27歳の大学院生まで、本学ならではの学習経験が積めるように、大学-附属間の連携を押し進め様々な試みを行っています。大学生の教

### 本山 方子(附属学校運営委員・文学部)

育実習ばかりでなく、近年は授業の一環で小学生と大学生が直接交流したり、支援活動の一環で中学生と大学生が交流するなどしています。

しかしなお、課題は山積みです。公立学校が社会のニーズに応じた変化を試みる折、附属にはこれまで以上に先導的な実践や提言が求められています。一方で、真摯な附属の教育を次世代に残す努力も必要です。つまり

「時代のニーズに応える」と同時に「時代を超えて必要とされる教育を提供する」という背反する要求に答えなければなりません。

学校を改革し、よりよい教育を実現する努力は、保護者や教員などおとなたちにも「我々(人間)はなぜ教育を必要とするのか」という教育の営みの意味を考えさせます。となると、実は幼児から老年までの学びの舎として、奈良女子大学は存在することになりましょう。保護者や教員の皆さんと齢を重ね、刺激しあうことを楽しみつつ、ともに教育の問題を考え解決していきたいと願っています。



## 「附属学校園ルネサンス」

勝山元照(附属中等教育学校:副校長)

### ○ 泰平の眠りをさます「在り方懇」

附属学校園は全体として、奈良女子大学の学生等総数の約32%、職員総数の約19%の規模があり、非教員養成系大学として大きな比重を占めています。また、奈良女子大学は幼稚園から大学院博士課程迄の全教育課程をもつ4大学の1つです。

戦後、附属学校園では独自の先導的な教育が進められましたが、教育実習や一部実践研究などを除いて大学との関係は徐々に希薄化し、近年はあたかも大学に対し「治外法権」地帯であるかのような状況がつついていました。しかし、2001年に文部科学省からいわゆる「在り方懇答申」が出されると状況は一変し、附属学校園は大苦境に立たされました。

幸い「大学における附属学校園の位置づけに関する検討委員会」をはじめとする関係の先生方の献身で、全学附属化＝附属学校部の創設、教育システム研究開発センターの設置という組織的対応がなされました。この間の事情は、前号の校園長座談会で詳しく述べられています。

附属学校園は再生2年目を迎えますが、法人体制下で「大学にとって、教育研究上真に必要と認められる」存在としての内実を創出できるかどうか、再生を図れるかどうか、等閑視が許されない状況です。以下、大学との連携概況を紹介します。

### ○ 「三本の矢」による連携

以前は、主として文学部が附属学校園の教育を支えるというのが常態でした。02年、附属中等教育学校のアカデミックガイダンスがはじまり、全学的な支援体制が整えられるようになりました。

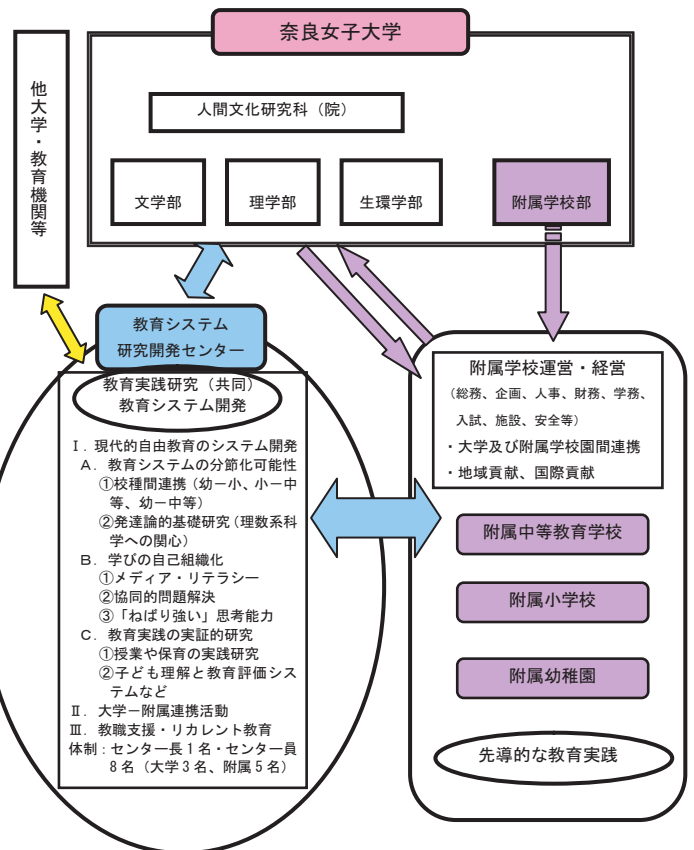
さらに04年、全学附属となったことで、大学と附属学校園間の距離が狭まり、3学部の支援もあって、附属学校園教育によき影響が出はじめています。一方、諸課題解決に向けて附属学校運営委員会も多忙になり、委員の先生方に「負担」をかけるような事態も生じています。

#### <文学部>

全学附属になったとはいえ、現在のところ、文学部に教育システム研究開発センターの中心的業務を担ってもらっています。附属学校園において、連絡進学児童を中心とした「幼小連携」「小中等連携」研究が行われています。また、「子どもたちの理数系科学への関心の構造を探る」研究、小学校での英語教育等が展開されています。さらに、アーティキュレーション(学校階梯)見直しについての研究の基礎作業に入っています。

#### <理学部>

理学部は、奈良県を「理科・数学大好き日本一」にしようと、以前から多くの地域貢献プランを実行していました。本年、附属中等教育学校がスーパーサイエンスハイスクール(SSH)に指定されたことから、蓄積されたスキルを生かした支援事業を実施してもらっています。



#### <生活環境学部>

SSH指定や食育基本法制定を受け、生活環境学部・食物栄養学科と附属が連携する形で「食の教育プロジェクト」を立ち上げ、附属小学校の栄養教諭の配置構想をはじめ、附属学校園と一体化した多くの取り組みを進めています。

このように、今附属学校園は全学附属として3学部とのつながりを深めつつあります。また大学院には教員リカレント等でお世話になっています。

### ○ 「まずは、附属より始めよ」

以前の附属学校園には「自己実践を絶対視する」夜郎自大的傾向、「困ったときの大学頼み、悪い事は全て大学のせい」といった甘えの構造が少なからず存在していました。弱小な附属学校園の手に負えないことは多くありますが、現在は「自力更生」的着想に基づかないと、何事も立ち行かない社会・財政状況です。また、附属間連携は「自治」の基本問題ですが、取り組みの一端を紹介しておきます。

- ・ 附属学校主任(研究、健康)を、全体の主任ポスト数を変えずに新設・配置。
- ・ 教育システム研究開発センターに、附属から5名のセンター員を派遣。
- ・ 附属学校部が各学校園の要求を調整し、概算要求を一本化。
- ・ 附属学校部ホームページの開設。合同研修会の開催。相互の各種研究会に多くの教員が参加。



## Topics 中等教育学校 ～スーパーサイエンスハイスクール(SSH)に指定～

本校は、2005年度から5年間、スーパーサイエンスハイスクール(SSH)の指定を受けた。

本校のSSHは、「自然科学リテラシーと自己学習力を身につけることで、学校を卒業後も能力を伸ばしていく科学技術系の人間を育成するための、中高6年一貫教育SSHカリキュラムを研究開発する」ことを目指している。

具体的な活動として、理数に興味のある生徒を対象とした「サイエンス研究会」を組織すると、1～5年生まで約70名の生徒が入会し、グループに分かれて活動を始めた。

夏休みには、「サイエンス夏の学校」を白浜で開催した。熱心に海の生物観察や地質観察に取り組み、夜は和田教授のカニの講義を聴いたり、数学の研修を行うなど中身の濃い研究会となった。その他、本校の化学プログラムへの参加、大学の研究室訪問、

東京ビッグサイトでのSSH生徒研究発表会参加など様々な活動を行った。

Ⅱ期には、大学訪問や大学教員を招聘しての、専門分野を生かした講義・実験(NSL講座)の試行、理数講義プログラムやサイエンスツアー等を計画している。

今後、より進んだ内容の科学の学習を希望する生徒には、理学部・生活環境学部での講義を受講できるようなシステムの研究も行い、本学との連携がますます深まっていくことを期待している。



## Topics 小学校 ～白浜で行われた臨海合宿～

附属小学校が毎年行っている臨海合宿は、2泊3日の日程で、5年・6年の全児童148名と全教職員20名が参加して、紀伊白浜で実施された。昨年までは、福井県若狭の久々子海岸で行われていたのだが、白浜に場所を変更して、今年が第一回目の開催であった。

7月16日(火)7時半、バス3台に分乗して学園前を出発し、高速道路を乗り継ぎ、「白良浜」にたどり着いた。投宿のホテル「三楽荘」で昼食をとり、午後からは早速、待望の海での水泳が始まった。

白砂青松とは、まさに、この白良浜にぴったりの形容であろう。きれいな砂浜、適度の波が打ち寄せ、透明な青い海と空。



子どもたちの歓声から、海に接する喜びや楽しさ、その満足感が伝わってきた。

○第一日目

旅館着・昼食・水泳・入浴・リーダー会・夕食・夕べの集い・花火・グループの集い・就寝(9時半)

○第二日目

起床(6時)・朝の散歩・リーダー会・朝食・水泳・昼食・昼寝・水泳(遠泳)・入浴・夕食・夕べの集い・グループの集い・就寝(9時半)

○第三日目

起床(6時)・朝の体操・荷物まとめ・リーダー会・朝食・海辺の観察・昼食・バス乗車・学校着  
初めての場所でもあり、事前の下見や計画に心を砕いたお陰で、従前に増して大きな成果を挙げて今年度の一大行事を終えることができた。

## Topics 幼稚園 ～「カンガルー劇場」開催～

当園では、保護者が行っているサークル活動のうち、人形劇部とコーラス部の出演を得て、「カンガルー劇場」を開催し、地域の未就園児の親子に参加を募っている。本来、園児が子ども会などで見せてもらっているプログラムを、是非地域子どもたちにも見てもらいたいと思い、昨年度から始めた。今回は人形劇「どうぞのいす」と、「ドラえもん」「げんこつ山のためきさん」「公園に行きましょう」などの歌や合奏を発表した。たくさんの参加があり、見に来た子どもたちにも好評で、楽しい人形劇に見入ったり、よく知っている歌をいっしょに口ずさむなどの様子が見られた。演じている保護者も、自分の子どもに見せるのとはまた違った意気込みをもって、一生懸命演じて下さっていた。

子育てや幼児教育に関する情報が氾濫している今

日、保護者にいろいろな不安や迷いが生じている。そういう社会の中で、地域に対する幼児教育の発信基地として幼稚園の役割が重要視されている。幼稚園の教育に対して関心を持ってもらうために、参加型の楽しい催しを企画して、幼児期に大切なことを伝えていく機会にしたいと考えている。そういう場で保護者の協力を得ることにより、見に来てくださる地域の人にもより親近感を感じてもらえるのではないかと思う。

今後とも、地域の人たちにも喜んでもらえる企画を考えていきたい。



## 子どもたちの活動

### <幼稚園> 夏の思い出～園内キャンプ～

7月17日・18日、たくさんのお楽しみが詰まった、1泊2日の園内キャンプが実施された。これは、年長児になった子ども達にとって、最大の楽しみともいえる行事である。

お楽しみのひとつは夕食のカレー作りだ。飯盒炊きで、ご飯がふつふつ炊ける音を聞いたり、慣れない手つきで野菜を切ったり。食事は屋外の手作りレストランで楽しんだ。自分たちで切った野菜の入ったカレーライスが格別においしいようで、おかわりをする子どもが何人もいた。

そして欠かせないお楽しみは、夜のキャンプファイヤー。赤々と燃える炎を見ながらキャンプのうたをうたったり、フォークダンスをしたりする。初めての夜の幼稚園に、思わずはしゃいでしまう子ども達。

幸い天候にも恵まれ、朝の園庭で虫採りをしたり、金魚すくいをしたりと、その他にも普段はできない幼稚園での遊びを満喫することができた。

キャンプを終えた子ども達一人ひとりの表情は自信に満ちていて、キャンプ前とはどこか違って見えた。両親と離れて先生や友達と幼稚園で過ごすことは、子ども達にとってとても貴重な経験となり、幼稚園の思い出としていつまでも心に残る行事である。



### <小学校> 学習のスタート「朝の会」

学級担任制の小学校では、40名の子どもたちが集団で学習したり、遊んだりして学校生活をすごしている。勉強以前に、集団生活をどう育てるかが、まず重要なところである。

本校の各学級では、「朝の会」を重視した学級経営に取り組んでいる。その中でのプログラムは、学級により一様ではない。一例として、①みんなで歌おう ②元気しらべ ③委員会からのお伝え ④友だちの話 ⑤先生の話 がある。

「みんなで歌おう」は、全学級が放送の歌（伴奏）に合わせて、一斉に歌う。学校全体が、「さあ、一日の学習生活が始まるよ。」と心の準備をする。

「元気しらべ」では、出席や健康状況を把握する。

「友だちの話」は、子どもの自由研究や日記の発表が行われ、子どもたちの楽しい時間である。

このような場と時間が用意されて、子どもの興味関心や意欲、表現力や創造性、そして自主性が培われていくことを期待している。



### <中等教育学校> 生徒が創る学園祭

生徒による、本校最大のイベントが学園祭である。2月に運営委員会が発足するところから学園祭は始まる。「自由・自主・自立」という本校の精神を具現するいちばんの場ともいえる。

教室指導部・舞台指導部などでは、高学年の生徒が、1・2年の教室展示や演劇を指導する。また、校門前に設置されるアーチを作成するアーチ部は、高学年になる程中心的な仕事を担いつつも、1～5年の生徒と一緒に一つ一つのアーチを作り上げる、中高一貫校ならではの取り組みである。

今年第61回学園祭。「WESTERN～その光と影～」をテーマに、9月17日・18日に開催された。天候にも恵まれた学園祭には、家族や友人が招かれ、また、本校受検を希望する児童やその家族も来校して、にぎわいをみせた。



## 2005年度 これからの主な行事

### <幼稚園>

11/3	若草山親子遠足
11/17	親子で作ろう
11/17～19	子ども作品展
11/25	お楽しみ劇場
12/1, 2, 5, 6	入園調査
12/15	クリスマス子ども会
1/14	お餅つき会
1月下旬～2月	クラス別子ども会 (生活発表会)
3/15	修了式

### <小学校>

10/15	秋の大運動会
11/4	写生会(奈良公園)
11/7	音楽鑑賞会
11/12	PTCC全体行事
12/1	音楽会
12/7～14	歩走練習
2/16・17	学習研究発表会
2/22～24	スキー合宿(4年生)
3/10	卒業式(第95回目)

### <中等教育学校>

11/2	体育大会
12/23	連絡進学適性検査
1/19	一般入学適性検査
2/7～10	3年スキー行事(黒姫)
2/24	公開研究会
3/1	卒業式
3/20	終業式

奈良女子大学附属学校園 Newsletter 02

2005年11月発行

奈良女子大学附属学校部

〒630-8506 奈良市北魚屋東町

TEL.0742-20-3938

Web <http://www.nara-wu.ac.jp/fuzoku/>